瑷（あい）

光耀抄 …… 2
琥珀集 …… 6
瑠璃集 …… 12
瑪瑙集 …… 24
紅玉集 …… 27
１月号月評 …… 28
恵贈俳誌拝見（６） …… 30
恵贈句集拝見（28） …… 32
特別作品「夏蝶舞へり」 …… 34
琥珀集作品鑑賞 …… 36
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ …… 37
Ⅱ …… 38
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞 …… 39
俳誌交歓 …… 41
姥の国父の蒼天（22） …… 42
三室戸寺・萬福寺吟行 …… 44
招き猫 …… 46
ひこばえ会通信（７） …… 47

2011/1　第58号

今月の一句

連れ瞽女や竹偶（でく）みな雪の虚空むき　桂樟蹊子

（昭和六十一年作）

水上勉さんの建てられた「若狭一滴文庫」を訪れたときの作品である。当時は水上さんの小説などを竹人形文楽として演じて見せてくれていたようである。一人の目の見えぬ女の子に連れられた替女を連れ瞽女と言うが、雪の中を行く瞽女竹偶たちはみな見えない目で虚空を見ていたという。木偶を竹偶と詠まれたのは樟蹊子の造語であることも付け加えたい。

隆　子

PDF= 俳誌の salon

鶏頭焚く

塩路隆子

ひと口を馬上杯より新走り

柿椀げば高騒ぎせる飢(かつ)ゑ鵙

夕映えの綿虫意志のあるごとく

小春日やをとこ盛りの犬に艶

冬もみぢ三面鏡に閉ぢ込める

鶏頭焚く銅(あかがね)色の香を放ち

千両より万両欲しと嫁したる子

PDF= 俳誌の salon

一月号光耀抄

塩路　隆子選

炉語りに十津川民話旅の宿　笠井　清佑
小春日や大津百町市の立ち　竹内　悦子
虫の音に包囲されをり忍びの家　松岡　和子
烏瓜眠る詩嚢に火を付ける　塩路　五郎
昏れなづむ比良の濃霧に灯のひとつ　井口　淳子
神様が乗るには淡し鰯雲　宮田　香
Ｖの字に広がる礫渡り鳥　石川かおり
大笹原色なき風の吹き渡り　坂根　宏子
こすもすに溺れしといふ羨まし　小澤　菜美
初霜の朝日に光る銀の畑　安本　恵子
茸売る老女のレジは五つ玉　山口キミコ
杣小屋の二間つづきや障子貼り　能勢　栄子
敗荷の水は力を抜きにけり　岡　佳代子
長子はや五十路に入るや障子貼り　杉本　綾
秋うららゲラン小瓶の「夜間飛行」　池田加寿子
維新坂しぐれに濡るる歩みかな　伊東　和子
秋落暉鍬の刃先に光り乗せ　笹井　康夫

PDF= 俳誌の salon

湯かげんの良くて長風呂夕しぐれ　清水侑久子
柿落葉焚けば煙と化す夕べ　吉田　晴子
遣唐使の戸惑ふ時勢そぞろ寒　増田　一代
「ひこにゃん」に人気集中秋うらら　三川美代子
生え際の銀色うぶ毛七五三　森下　康子
名も知らぬ坑夫の墓へ野菊かな　西田　史郎
こぼれても帝王の色実紫　小西　和子
黒壁のガラスエ房菊日和　山本　孝夫
葛湯溶く短編集の一区切り　北尾　章郎
夜叉王の面を遺して紅葉寺　坂上　香菜
目を凝らし未明の富士や露葎　鈴木　照子
フィナーレを飾る遷都や秋夕焼　小林　成子
長き夜や「ダンテ神曲」読み倦み　田下　宮子
訪へば漢ひとりの菊膾　阪本　哲弘
勾玉は祈りのかたち秋深き　片岡久美子
吊橋のダム湖を跨ぎ冬の虹　伊藤　純子
天空に音声菩薩舞ふ花野　中村ふく子
冠雪のアルプス遥か陽を弾く　川崎　利子
阿修羅像の三面六臂冷まじく　藤見佳楠子
谷戸の村眠りて蕎麦の花明り　大島みよし

PDF= 俳誌の salon

里の秋背負子媼を点景に　粟倉　昌子
たよりなき厚さのテレビ文化の日　和田森早苗
痩身のイケ面案山子顎にひげ　桂　敦子
原節子のエッセイを読み文化の日　和田　郁子
朱の褪せし五重の塔や紅葉照　前川ユキ子
訪ふ里の鯖鮨旨し赤のまま　宮崎左智子
焼印の濃きまんじゅうや明治節　高谷　栄一
湖の真上広がるいわし雲　中川すみ子
秋澄めりそびゆる塔に鎌の影　田中　眞
トンネルを抜ければ故郷秋めける　谷口　俊郎
石塔に揺るるコスモス風を知る　田村　幸子
水澄める飛騨の暮らしの素朴かな　田中　浅子
風受けて時雨踊るや鎖樋　辻　知代子
寒木や美しき肋をもち詩人　常田　創
父と児の湯揉み体験湯気の中　土井くみこ
蒲団干し陽の温もりを夜の床に　冨田ヒナ江
秋陽濃し螺鈿五彩の琵琶を見に　紀川　和子
土瓶蒸和のしつらへの一夜宿　小林　久子
コスモスの母国すなはち地震の国　青山　正英
縁側に小さき菩薩や菊日和　五十嵐　勉

朝寒の空気震はすヘリ三機　泉　秀行
好奇心とおしゃれ感覚返り花　伊藤　憲子
蜆めしの客呼ぶ声や紅葉晴　伊庭　玲子
乗る馬車に紅葉且つ散る帝釈峡　上甫木伊都子
老いたれば肺炎ワクチンそぞろ寒　宇治　重郎
パリの路地銀杏黄葉に染まりをり　山本　丈夫
檣頭にZ旗小さし秋高く　横田　矩子
付筆紙の最後一枚冬に入る　吉田　希望
うっすらと地球照なる冬三日月　山崎　真義
整理せむ秋の更衣をきっかけに　松田　洋子
刃を入れて種なき柿や大当り　村田　望
錦秋の記憶に筑紫ローカル線　秦　和子
一握のむかご手にしてしたり顔　福本スミ子
暴れ川大蛇のごとく秋出水　藤本　秀機
彩れる欄間の花鳥冬御殿　長濱　順子
見え隠れ雉子が塒の芒原　中本　吉信
天高し児と喜寿乗せて縄電車　新実　貞子
呆け防止ルート解きゐる夜の長き　西垣　順子
飽く間なくパターン変へをり秋の空　難波　篤直

PDF= 俳誌の salon

琥珀集

秋時雨

竹内　悦子

湖へ入るまでを鶺鴒川遊び
今様の歌は知らぬよ赤蜻蛉
秋時雨湖鳥陣を解かぬまま
仏手柑の飴を舐めつつ善き予感
つけまつ毛長きレジの子そぞろ寒
小春日や大津百町市の立ち
止まるならこの胸飾れ雪蛍

木の実時雨

松岡　和子

錦秋の鞍馬街道根っ子道
湯の宿の夜どほし木の実時雨かな
知るだけの歌唄ひつつ栗を剥ぐ
小春日の赤子のひとり語りかな
亡き人にめぐり逢へさう花野かな
虫の音に包囲されをり忍びの家
秋耕や山に兜れて小休止

茶粥膳

笠井　清佑

神無月熊野の杜に濡れし燈
冬宿の娼のもてなす茶粥膳
吊橋に身を委ねつつ冬紅葉
炉語りに十津川民話旅の宿
仏頭の目尻きりりと冬めける
十津川の川沿ひの宿や茸飯
大川の流れ淀ます下り簗

PDF= 俳誌の salon

烏瓜

塩路　五郎

烏瓜眠る詩嚢に火を付ける
踏切の音に追はるる落葉かな
枯菊を焚きて残り香身に纏ひ
廃線の駅舎を飾る石蕗の花
カンバスに描き出せざる虫の声
天上に出入口なき小春かな
猛り鵙ひと日国力貧しかり

芋水車

井口　淳子

昏れなづむ比良の濃霧に灯のひとつ
芋水車回る門川鯖の道
人力俥行き交ふ「嵯峨野」初時雨
落柿舎に鴉の残す柿ひとつ
単線の時刻板見る日の短か
海のぞむみかん明りの段畑（八幡浜）
宇和島の海光返すみかん摘む

ななかまど

宮田　香

勝ち馬は黄がマイカラー菊花賞
芒持つ父の背を追ふ夕小径
猫じゃらし悪面石を撫りぬ
亡き人の長き髪梳く十三夜
アルプスの登山口なりななかまど
神様が乗るには淡し鰯雲
柘榴の実目玉百余を潜ませて

冬茜

石川かおり

銭湯の一番風呂や秋の暮
飛行機の尾灯ほのかに冬茜
切干に淡き日向を含ませる
Vの字に広がる礫渡り鳥
ならまちのカフェに行列冬麗
蒸しパンの湯気しっとりと秋暮るる
酒蔵にリボン掛けたる蔦紅葉

PDF= 俳誌の salon

色なき風

坂根　宏子

大笹原色なき風の吹き渡り
笹原にひそと咲きをり濃竜胆
道の駅とんがり屋根に秋の風
枯尾花翳して子らの鬼ごっこ
札所への参道たわわ柿実る
楢枯れの続く山径秋愁ふ
秋の山をさな子連れし父あまた

ＣＴ室

小澤　菜美

ピラカンサ実を高々と冬立つ日
フビライの不意の目覚めや秋黄砂
こすもすに溺れしといふ羨まし
湖のここより運河柳散る
冷え冷えとＣＴ室の孤独感
僧継がずドラム三昧秋うらら
風船葛のひとり遊びや裏窓に

銀の畑

安本　恵子

よーいどんにだんだん本気運動会
松茸の香りこぼるる旅鞄
夫と食む不老長寿の山の芋
「齢だな」と笑顔の卒寿柿を挽ぐ
三日目の旨きカレーや秋深き
木枯しを受けて重たきペダルかな
初霜の朝日に光る銀の畑

絵巻灯籠

山口キミコ

源氏絵の絵巻灯籠宇治の夜
秋爽やライトアップの鳳凰堂
笛太鼓響く中洲や宇治の秋
丹波霧に煙る山並老ノ坂
小谷城偲ぶ三姫秋思かな
時雨るるや近江の古寺に庇借り
茸売る老女のレジは五つ玉

PDF= 俳誌の salon

絵　皿

能勢　栄子

秋の日や漆絵皿の出来上がり
秋高し夜久野が原へ蕎麦食べに
太鼓打つ人へ振るまふ祭酒
身に入むや玄関にある松葉杖
杣小屋の二間つづきや障子貼り
鴉へと照るてっぺんの残り柿
コスモスへ手毬ころころ隠れけり

星月夜

岡　佳代子

貫禄のプリマ歌へり星月夜
犬のリボン少女のリボン秋桜
十時はや朝顔花に疲れかな
ハモニカは鋼の匂ひ晩夏光
落暉いまたわわの柿に宿りけり
敗荷の水は力を抜きにけり
秋雲に載せて弱気を送り出す

障子貼り

杉本　綾

茶の熱き立杭茶碗笹子鳴く
碧眼の点前美し佗椿
長子はや五十路に入るや障子貼り
けふ晴れて句会楽しや鰯雲
吸物に柚子の一片匂ひけり
上級試験合格の子や天高き
仏前に木犀一枝仄かな香

小白鳥

池田加寿子

木枯しや虹の向かうに比良比叡
劇場に華やぐ人や白き萩（国立劇場）
蒲生野の色鮮かな秋桜
秋うららゲラン小瓶の「夜間飛行」
稲を刈り干しゐる農夫天城ぐらし
農作の労をねぎらひ芋煮会
風の中湖北に群るる小白鳥

PDF= 俳誌の salon

龍馬像

伊東　和子

身に入むや維新史実を述ぶる文
維新坂しぐれに濡るる歩みかな
龍馬恋ふ若者多し柿日和
澄む秋の京を望める龍馬像
整然と藩士の墓碑やなごり虫
京町家に志士の名とどめ返り花
釣瓶落し塔を包める夕けはひ

錦秋

笹井　康夫

冬に入る電車待つ間の風を避け
松風を聞きつ無心の松手入
朝霧にぬっと現れ釣小舟
黄葉して天を飾りぬ大銀杏
錦秋へ湯けむり上る露天風呂
眦に熱さ覚えて菊花展
秋落暉鍬の刃先に光載せ

一葉散る

清水侑久子

絵蝋燭ゆらぐ静寂や秋深き
山坊の法話続けり月の宵
先に逝く妹の命日一葉散り
朝霧や光秀偲ぶ城下町
いつしかに雨ほつほつと吾亦紅
湯かげんの良くて長風呂夕しぐれ
秋愁ひ土塀崩るる大和古寺

吾亦紅

吉田　晴子

草もみぢ京と近江の国境ひ
杜鵑草吾が文机に愛でをりぬ
柿落葉焚けば煙と化す夕べ
和太鼓にゆらぐ一山運動会
竹の春朝日きらめく窓眩し
言葉なき家の淋しさ吾亦紅
旅果てに出迎へ喜々と柿紅葉

PDF= 俳誌の salon

平城京　　増田　一代

白露けふトラムに揺られ朱雀門
活溌な扮装の娘へ赤とんぼ
秋晴やいにしへ見つめ三笠山
小春の日老若こぞり大極殿
再現の平城京や秋夕焼
荘園に近鉄路線猫じゃらし
遣唐使の戸惑ふ時勢そぞろ寒

初時雨　　三川美代子

初時雨燭の妖しき阿弥陀堂
減反や見渡す限り大豆畑
夕闇に暫しの無言虫を聞く
万葉へタイムスリップあきつ飛ぶ（蒲生野）
「ひこにゃん」に人気集中秋うらら
野分来る皇帝ダリヤ折れないで
一輪車の女児にまつはり秋の蝶

七五三　　森下　康子

エコパッグ配られてゐる街小春
キャンパスノートに文字溢れしめ長き夜
年嵩を狙ふ詐欺師や神の留守
生え際の銀色うぶ毛七五三
襟たてて家路急げる都心かな
夕厨匂ふ煮大根帰り待つ
さよならと手を振る別れ石蕗の花

猪　鍋　　西田　史郎

猪鍋に酒は「小鼓」丹波かな
柿たわわ獲る人もなき山の里
名も知らぬ坑夫の墓へ野菊かな
新蕎麦に惹かれ宿場の茶屋暖廉
茶の花の囲める芋銭旧居かな
渓谷も山も染め上げ紅葉晴
冬椿咲きて淋しき社かな

PDF= 俳誌の salon

瑠璃集

長き夜　小西　和子

長き夜の讃歌となせりパバロッティ
こぼれても帝王の色実紫
古都住みの小さき中庭石蕗の咲く
冬日影ゴッホの孤独思ひけり
鼻唄の厨に香り栗の飯

近江路　山本　孝夫

近江路の湖風に揺れ蕎麦の花
黒壁のガラスエ房菊日和（長浜）
青蜜柑剥けば幼き日々のこと
古株を活性化せる櫓かな
立冬のまこと穏やか落暉いま

走り蕎麦　北尾　章郎

纏まらぬ三分スピーチ夜の長き
友ゆきし黄泉は圏外秋深き
タクシーの奨めの昼餉走り蕎麦
葛湯溶く短編集の一区切り
夕日差し暮色の映ゆる葡萄棚

沙羅黄葉　坂上　香菜

ひっそりと頼家の塚沙羅黄葉
花八手頼家菩提の指月殿
夜叉王の面を遺して紅葉寺（修善寺）
頼朝の配流の島や秋の風（蛭ヶ小島）
修善寺の漱石詩碑や紅葉山(修善寺自然公園)

未明の富士　鈴木　照子

墳巡るエコタクシーや秋桜（馬見丘陵）
金賞の菊花壇あり古墳跡
目を凝らし未明の富士や露葎
溶岩坂に不意の動悸や黄葉散り(富士五合目)
茸博士を自称せる児やアウトドア

PDF= 俳誌の salon

一月号月評

塩路　隆子

炉語りに十津川民話旅の宿　　**笠井　清佑**

十津川は奈良県の南部にあり谷瀬の大吊橋でも有名な土地柄であるが、矢張り南北朝の頃は吉野朝の軍争経済面での後背基地であった。また南朝の遺臣と伝えられる十津川郷士は、倒幕軍を起こす目的で、土佐の吉村寅太郎、備前の藤森鉄石らと天誅組を組織、挙兵するなどしたが政変により、諸藩兵の追討を受け壊滅するなど、さまざまな歴史をもつ土地である。作者はそこを訪ねられた。宿泊された宿では十津川の様々の歴史から生れた民話のさまざまを聞かせて貰われたようである。充実した一夜を過されたことであろう。ちなみに十津川の人達は武士の血が流れていることを誇りとしているし、住民の顔立ちにはその血の名残であろう品位があると聞かされた記憶がある。いまでも民家の軒には手作りの柚べしなどが見られる土地である。

小春日や大津百町市の立ち　　**竹内　悦子**

大津町琵琶湖水運の集荷港として、また東海道の宿場町として江戸時代初期から繁栄をみせて、元禄年間には百町の都市へと賑わい成長したようである。その頃のなごりであろう今でも昔ながらに百町に市が立つようである。うらうらとした冬の日差しの中での市巡りはさぞ楽しみなことであろう。筆者も是非一度訪れたい市である。小春日の季語が市をもり立てている。

虫の音に包囲されをり忍びの家　　**松岡　和子**

作者は甲賀にお住まいである。以前に作者の「凍て空や峡七軒と交信す」を取り上げたことがあるが、甲賀の奥深い所にお住まいである。俳句に対す向学心は追随を許さない。毎月の句会は勿論、俳人協会の全講座にも真っ先に申し込まれた。山科句会や、相当の遠距離生駒句会へまでの片道二時間の出席も欠かされたことがない。ご熱心な方である。甲賀の忍者村には昔のままの忍者屋敷があり、からくり戸や井戸、さまざまな忍者グッズを集めて見学させてくれる。そこを訪れられた虫の夜を詠まれた作品。いろいろな虫が忍者の家を包囲して鳴き競っている。この句の面白味は「包囲されをり」と「忍びの家」の取り合わせである。さて忍者はどうやってこの家から身を隠すのであろうか。色々の連想が広がり楽しい句に仕上がっている。

（以下略）

PDF= 俳誌の salon